VISION

The Brotherhood of St. Andrew Japan, Inc.

《幻（ビジョン）がなければ民は堕落する》箴言29章18節

一般社団法人日本聖徒アンデレ同胞会
〒105-0011 東京都港区芝公園3－6－18
日本聖公会東京教区会館内
3－6－18 Shibakoen, Minato-ku, Tokyo
TEL 03－3436－4325 FAX 03－3432－1696
http://www.brotherhood-st-andrew-japan.org

BSA会報《季刊発行》
発行人　足立征三郎
編集者　萩谷長生
印刷所　㈱インパルスコーポレーション

足立会長、盛岡支部を訪問

足立征三郎会長が6月17日、盛岡支部を訪問した。新体制で画期的な訪問である。木島出副会長と萩谷長生理事が同行した。

BSAの支部は全国に16ある。そのうち14支部は東京・横浜両教区内にあり、残りが盛岡と福岡にある。

一昨年から「本部だより」を発行して、支部との関係強化に努めてきたが、足立会長は、これをさらに進める必要があるとの認識から、今回盛岡支部訪問が実現した。

任期中の2年間にできるだけ多くの支部との懇談会を実施する方向で調整している。

盛岡聖公会は駅前のビジネス街に隣接するも、閑静な佇まいの中に立地し、その礼拝堂は内外共に宣教110周年の伝統を物語る瀟洒な構造である。

支部チャプレン林国秀司祭の司式、説教による聖霊降臨後第4主日の聖餐式にはBSA会員を含めて恐らく50名を越える出席があり、盛会であった。若手会員である赤坂健兄の奏楽奉仕も本部と支部が共に祈る場に相応しいものであった。

礼拝後に行われた定例の支部例会は、10名の会員等諸兄（氏名は赤坂徹支部長による報告記事に掲載）が出席し、本部役員3名が同席した。冒頭、林チャプレンは、かつて立教BSAの奉仕活動の果実として室根聖ナタナエル教会が生まれたこと、また近年では震災復興支援の拠点へ活用されている事例（VISION 156号参照）に触れ、本部―支部間の連携の観点からも今回の訪問を歓迎するとの発言があった。

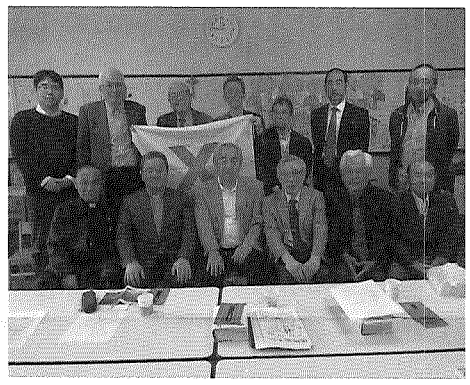
支部例会の主要なプログラムである「聖書の学び」は、すでに10年以上にわたって脈々と継続されており、これこそ支部活動の根幹をなすものであろう。支部会員の一人ひとりがわれわれ訪問者を加えていつも通りに学びを実践する姿に感動を覚えた。そして本部と支部のあり方などについて議論するのと同様に、あるいはそれ以上に、このような場を共有できたことは今回の訪問の大きな成果の一つであったと確信する。

懇談会の席で意外にもBSA機関紙VISION以外にもビジョンが存在することを知った。画家でもある加藤昭夫兄による手作りの会報「ビジョンもりおか No.18」が配布、披露された。教会内外のトピックが挿絵入りで盛り込まれていた。

支部顧問の金子昭三執事によると、以前には八戸でもBSAの活動があり、昨年秋には当教会と八戸聖ルカ教会との交流会が行われたとのことである。

これを受けて足立会長は、東北の地にBSAが育まれた過去を知り、歴史を辿り、そして近い将来には八戸を含めて主教座のある仙台にもBSA支部が設けられるよう希望する旨発言し、今後とも各地の支部と連携してBSAの働きをますます活性化させる決意を述べた。最後に、今回実現した本部と盛岡とのface to faceの交わりを「希望のBSAをめざして」推進したいと締めくくった。

VISION編集担当
萩谷長生



BSA会長を迎えて

盛岡支部長　ルカ　赤坂　徹

聖徒アンデレ同胞会盛岡支部は故村上秀久司祭によると1951年（昭和26年）5月22日にBSA本部役員が盛岡を訪問され、支部結成式が挙行されました。

2018年（平成30年）6月17日（日）礼拝後に仁王幼稚園の保育室で支部6月例会が開催され、本部から足立征三郎会長、木島出副会長、萩谷長生理事（広報担当）が出席されました。盛岡聖公会から林国秀司祭（チャプレン）、金子昭三執事（顧問）、赤坂徹（支部長）、斉藤高夫（副支部長）、相澤洋（会計）、圓子敬一（書記）、小林誠、赤坂健、加藤昭夫、土居和喜諸兄が参加しました。

林司祭の歓迎の挨拶の中で、盛岡支部会員がサーバーや使徒書朗読を担当し、その予定表を作成して礼拝奉仕活動をしていると話されました。昼食後にはBSAの旗と共に写真を撮影しました。同胞会聖歌（古今聖歌140番）、開会の祈りに続いてルカによる福音書6章を全員で輪読し、赤坂支部長が解説した後、金子執事が感想を述べました。その後、金子執事によるお祈りで終了しました。懇談会では加藤兄が会報「ビジョンもりおか」にある盛岡聖公会宣教110周年記念礼拝と祝会の内容を紹介しました。昨年秋に八戸聖ルカ教会と盛岡聖公会の交流会があり、金子執事から以前には八戸にもBSA活動があったと報告されました。赤坂支部長からBSAが今後とも成人男性信徒に聖書勉強の場を提供し、奉仕活動を継続し、婦人会、聖歌隊などのグループと連携していきたいと話されました。足立会長からは仙台などにも支部ができるように呼びかけたいと話されました。

BSAセミナー参加者募集
外国人墓地最初の埋葬者の葬儀

1854（嘉永7）年3月、アメリカのペリー提督一行が横浜沖に停泊中、乗組員が作業中に転落、死亡しました。

葬儀は同行のチャプレンが聖公会祈祷書に従って行い、遺体を埋葬、その後日本人僧侶が読経しました。外国人墓地最初の埋葬者です。

葬儀を巡って双方はどういう交渉をしたのか、近隣の住民はどう反応したか、聖公会式葬儀をめぐる日米交渉の一コマを検証します。

会員、非会員を問わずみなさまのご参加をお待ちしております。

日　時：10月13日（土）　10時－15時　**会　場**：横浜山手聖公会集会室
テーマ：外国人墓地最初の埋葬者の葬儀
講　師：根谷崎武彦氏（横浜山手聖公会信徒・聖公会史談会会員）
日　程：10時－講師の話と質疑・昼食（持参）
午後－現地見学（外国人墓地、埋葬場所ほか）
参加費：500円（当日払い）
申し込み：氏名・住所、連絡先（メールアドレス、電話・ファクス番号）を書いて、下記宛お申し込みください
申込先：BSA本部 セミナー係
メール：bsa@nskk.org　ファクス：03-3432-1696
郵送：〒105-0011 港区芝公園3-6-18　聖公会東京教区事務所内BSA本部
締め切り：8月20日（月）
お申し込み者には、後日、詳しいご案内を送ります。

秋の研修旅行（お誘い）

第3回「東北巡礼の旅」を9月12日（水）・13日（木）を実施日として、秋の「BSA研修旅行」を計画します。

訪問先：
・磯山聖ヨハネ教会・祈りの庭
・小名浜聖テモテ教会
・原発事故による帰還困難区域
交通手段：乗用車数台を予定
参加費用：25,000円程度

東日本大震災による津波災害や原発事故による被災から7年が過ぎ、福島県の現況はどのように変わってきたのかを知るために、磯山聖ヨハネ教会および小名浜聖テモテ教会を訪ね、お話を聞く旅を企画しました。

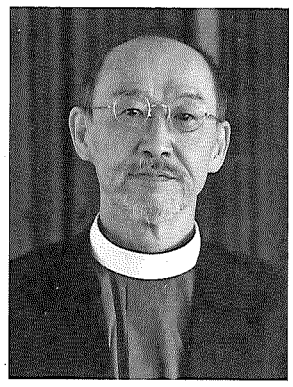
また、原発事故による避難解除地区および帰還困難区域に赴き、原発事故の深刻さを実感し、「私たちにできることは何か」を考えるきっかけとしたいと思います。

往復の足に「自家用車」を使用するため多人数の参加がかないません。参加希望者は、お早めに、本部宛お名前・連絡先をお知らせください。10名前後の参加を予定しております。

E-mail：bsa@nskk.org
FAX：03－3432－1696

「お一人おひとりと」

東北教区主教　ヨハネ　吉田　雅人



昨年の11月30日、使徒聖アンデレ日に公会の主教に叙任され、東北教区主教に就任して、はや半年が過ぎました。私は神学校を卒業してから38年間、神戸教区と京都教区で働いてきましたので、全く生活環境の異なる東北教区での自然や人との出会いを、ある種の戸惑いと共に、とても新鮮に感じています。

一番の戸惑いは地理感覚で、それまでは南か北にあったはずの海が、東か西にあるというのは、なかなか理解できませんでした。自分の頭の中の地図を書き換えないと、車の運転ですら不安になってしまいます。とにかく一日も早く、教区内の教会をお訪ねして皆さんとお目にかかりたいと思い、本紙のこの号が出る時には、すべての教会を回り終えているのではないかと思います。

このように教会を巡回して気づかされたことは、やはり高齢化が進んでいるということでした。もちろんこの現象は私たちの教区だけのことではなく、日本聖公会全体の、否、日本社会全体で起きている現象ですから、そんなに悲観的になる必要はないのかもしれません。このようにいうと、何か「高齢化」がいけないことのように聞こえてしまいますが、もちろん、そんなことがあろうはずもありません。

そうではなく、私たちが考えなければならないことは（私が言うまでもなく、すでに実施しておられる教会も多いこととは思いますが）、高齢の信徒の皆さんが礼拝に出席しやすい環境、礼拝後も教会での交わりを続けやすい環境になっているか、ではないかと思います。

かつて、私が勤務したある教会では、自動車で礼拝においでになる信徒の方が、その道筋に住んでおられる高齢の信徒の方を乗せて来てくださっていました。主日の礼拝に行きたいんだけれども、バスの便が悪い、本数が少ない、雨が降ると足元が不安で出にくい。そのような高齢者の方々の小さな声を聴いたその方が自発的に始められたこの動きは、またたく間に他の信徒さんにも広がり、そのような奉仕をしてくださる方が何組も生まれました。それも乗せていただく方が、あまり気を遣わないですむようなお誘いをしておられました。本当に感謝でした。

また別の教会では、礼拝だけ出席してそのままお帰りになる方に、必ず一声かけてくださる方がおられました。後でお聞きしましたら、自分はどちらかというと人見知りするタイプなので、初めて教会を訪れたときも不安だらけだった。けれども、その方が「おはようございます」とか「帰り道、気をつけてネ」と一声かけてくださったとき、とてもホッコリした気持ちになれてうれしかった、とおっしゃっていました。そして小さな声で「今度は、自分もその方のようになれるといいな、と思っているんです」と言っておられました。

多分、大きな声で語る壮大な計画は、私たちの教会にはあまり必要ないんじゃないか、そんなふうに思えます。むしろ私たち一人ひとりが、ささやくような小さな声に耳を傾けることができるかどうか。そのささやきに小さくてもよいから、私たちが少しでも応えられるかどうか。そのようなことが問われている、求められているのではないかと思うのです。

「祈祷と奉仕」に加えてBSAが大切にしてきた指針、「一人が一人を」もこの点でつながっているように思います。このことは、マタイ9:20以下やマルコ5:25以下に記されている「12年間も患っていたひとりの女性の癒しの物語」のように、イエス様が当時のユダヤ社会の中で見えなくされていた一人ひとりを大切に愛され、その人自身と向き合い、小さな声に耳を傾けられた、その在り方に基づいているのです。

教会の使命とは何か、いろいろな言い方ができると思いますが、イエス様の生き方に倣って生きるように努めるということでしょう。そのために私たちは主日ごとに主の御名によって集められ、御言葉と聖餐によって養われ、主の御名によってこの世界に派遣されていくのです。

記念誌『希望のBSAをめざして』に寄せられた声

前理事　元田充隆

90周年記念誌『希望のBSAをめざして』を受け取りました。これまでのご苦労を側でみてきただけに嬉しく目を通させていただきました。

主教　森　紀旦

春と一緒に『希望のBSAをめざして』が届きました。とても明るくきれいに、また、喜びに溢れている感じです。これからゆっくり読ませていただきます。

100周年に向かい、BSAのじっくりとした歩みを祈ります。

本部チャプレン 司祭　高橋宏幸

表題ともども、素晴らしい冊子をお送りいただき、ありがとうございました。大変な作業でいらしたことと拝察申し上げます。

「希望」は信仰生活、霊的生活にとりまして大事な礎、柱でもありますだけに、文字にすれば二文字ですが、そこに込められておりますこと、殊に神様から授けられている希望に思いを馳せたく存じます。

会員　高橋正二

長い期間取りくまれました記念誌『希望のBSAをめざして』をお送りいただき有難うございました。文字ばかりにならぬよう、写真も多用し、「ちょっと一服」などのコーナーもほっと致します。

執事　金子昭三

とても素晴らしいBSA90年誌ありがとうございました。殊に短歌「ちょっと一服」に感服、泪があふれました。これからも長いお働きを祈りいたします。

評議員　松田正人

装丁、内容、活字、割付すべて出色の出来栄えです。『希望のBSAをめざして』というタイトルは、未来に向けたクレドともいうべきもので、素晴らしいと思いました。座談会も興味深く読みました。今後の問題は、会員以外の人たちからのBSAへの期待感があるのかどうか、「祈りと奉仕」をどのように徹底するのかということでしょう。

首座主教　植松　誠

とても立派な記念誌で、どのページも読み応えのある深みを感じました。

90周年記念礼拝での説教を載せていただき、少し恥ずかしい思いもいたします。私の両親に見せたい記念誌です。

（到着順）

記念誌が語ること

理事　ヨハネ　松平謙次

今年の3月に出来立てのホヤホヤ記念誌が本部に搬入された時、すぐさま手に取りました。そして装丁の美しさ、工夫されたレイアウト、各ページの写真や文字の見やすさ・読みやすさに思わず唸りました。これは偏に福永澄氏のセンスと技量によるもので、そのお仕事ぶりに脱帽し、敬意と謝意を表します。

内容は、といえば、編集に一方ならぬお骨折りをいただいた吉松英美理事・編集委員の『ちょっと一服』にあるように、「記念誌に70人の寄稿あり深き想いと期待をこめて」、「それぞれの人にそれぞれのBSA―」、「―一文字ごとにその人の息」がひしひしと伝わってくるものでした。書かれていることは鋭く厳しいもの、心温まるもの様々です。お書きになった方のお名前は一々挙げませんが、心に残った言葉を挙げます。

「記念というのは私たちが過去を懐かしがったり、昔の追憶に耽ること」ではなく「神の恵みが今もここにあり、あの時の誓いを今も私たちの現実とする」こと。確かにBSAは今、「日本の聖公会が直面している課題と相似形であり」、「会員の高齢化や財政問題から、その存立基盤は大きく揺らいで」いるとの指摘は認めざるを得ない面がありますが、「困難や絶望の中でも一条の光を信じて生きるBSA会員の生き様」は、たぶん昔も今も変わらないであろうと信じます。

そして私たちは「再び根本的なことに専念するよう求められている」、「すなわちキリストの福音にある自由と喜びを自分の生活のバックボーンにしつつ『祈り』と『奉仕』を通して、その自由と喜びを周りの人にもたらすこと」、「まず自分の心、一人一人の心が新たにされなければなりません」。同時に「BSAの精神は私の心にすっかり入り込み、私を支えてくれていると確信しています」、「BSAは私のクリスチャンであることの原点」という仲間がいることは私たちを力づけてくれます。（BSA精神の根底は）「この世の常識、社会的規範とは異なる価値観に支えられているのです」、「『形』よりも、見えないけれど確かにある『BSAスピリッツ』を継承することが大事なんだ」、「喜びと祈りと感謝があるところには、自然に人は集まってきます」、「いつ・どこででも集まればキリスト者の同胞として互いが連帯し結ばれている信仰」、「親、兄弟、友人という枠を超えて、その人の人生に影響を与えるような他者との出会いこそBSAの魅力」などの言葉は改めてBSAとは何かを示唆してくれます。そして「BSAの発展の秘訣、原動力は会員の祈りから溢れ出る喜びと感謝の生活にあり」、「神によって始められた働きはどんなことがあってもつぶれることはありません」、「教会を自分たちの生活に位置づけること」。それが「BSA会員として生きる者の喜びであり、励みと希望である」という言葉に励まされ勇気づけられ進んでいきたいと思います。具体的な方策も「女性会員を認める」、「空白地帯の教会を訪ねるキャンペーン」、「諸規定のアップデート化」、「広報活動の充実」、「立大BSAとの交流・連携」など多くのことが提言されています。実現に向けて十分検討されることを望みたいと思います。

最後になりますが、90年間、特にこの20年間に先人たちや仲間たちが残した足跡、業績―例えば20年近くもの間、国見登氏の献身的な働きのもとに続けられたキリシタン遺跡巡礼など―を虚心坦懐に振り返り、評価して将来の「希望のBSA」に繋いでいきたいと思います。

清里支部「教会めぐりツアー」平塚を訪ねて

まさに梅雨の晴れ間といった初夏の日差しの6月18日、年に1回の清里支部主催プログラム「教会めぐりツアー」一行22名（支部チャプレン：大野清夫司祭）を乗せたバスは快調に平塚を目指しました。圏央道開通により、中央道長坂ICから茅ヶ崎海岸までの150kmの道のりが全て高速道路となり、およそ2時間余りで結ばれたおかげで、午前11時には平塚聖マリヤ教会に到着することができました。

今回の訪問先である「平塚聖マリヤ教会」には、今年の3月まで清里の教会に勤務されていた島田司祭が“里帰り赴任”されていることで目的地に決めさせていただいたこともあり、参加者は司祭夫妻との3ヶ月ぶりの再会を喜び、平塚の教会の皆さんと共に和やかな交わりの時を持つことができました。

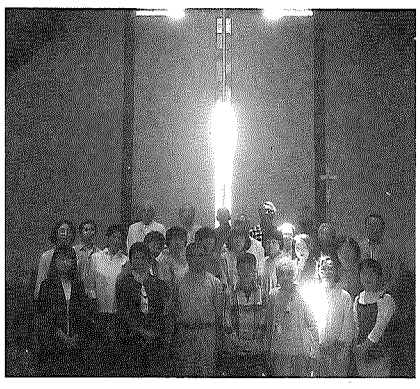
また今回は、今年の2月に就任された足立征三郎新会長をお誘いし、現地・平塚で合流してプログラムにご参加いただきながら活動の様子をご紹介させていただきました。お忙しい中、お時間を頂きましたこと誠に感謝です。

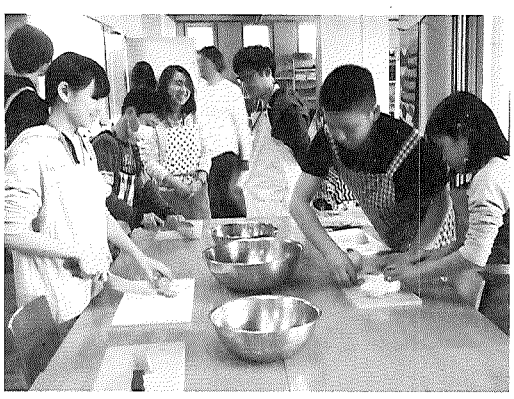
お昼ごはんには、教会近くの島田先生おすすめの海鮮ランチをご一緒し、その後、車で20分ほどの距離にある「社会福祉法人・子どもの園」を訪問しました。お茶をいただきながら和田園長のお話を伺い、改築中の園内施設を案内していただきました。園長ご夫妻の50年の長きにわたる愛情いっぱいの尊いお働きには、本当に頭が下がる思いです。毎年夏、子どもの園は「清里キャンプ」を実施し、1週間ほど清里の教会中庭でテントによる完全自炊のキャンプ生活を送ります。これからもよき交わりが長く続いていきますようにと思いを新たにしました。

名残はつきませんでしたが、今回もたくさんの喜びや感動に加え、美味しいシラスや干物をお土産に帰途につきました。

主の平和

（報告者：BSA清里支部長　アブラハム　野田　徹）





第4回「青少年キャンプ」開催

昨年に続き、清里「自然学校」を会場とし」聖週に入った3月26日から3日間、2泊3日の日程で開催されました。

今年は14名（男子4名・女子10名）の参加があり、支援学生スタッフ4名、BSA／KEEPの支援スタッフが協働し、豊かな自然の中、沢山の恵みを受けてまいりました。

青少年キャンプの感想

スタッフ　新妻夏奈

私は今回のキャンプが3回目の参加でした。このキャンプは毎年同じプログラムでも、その年の参加者によって毎年雰囲気や色が異なり、とても面白いと感じています。特に今年はとてもパワフルなキャンプでした。リピーターの子たちが初めて参加する子を巻き込んでみんなで遊んでいたことが印象的でした。子どもたちのコミュニケーション能力の高さには毎年本当に驚かされます。私自身も子どもたちのパワーに巻き込まれて全力で遊び、3日間を楽しむことができました。

個人的には、このキャンプに関わらせていただいた当初は、この青少年キャンプが、SSNの教区小学生キャンプ、中高生会（中高生世代キャンプ）、教区青年会の3つの団体が連携してつながり、それぞれのキャンプを卒業する年齢になっても次のキャンプや団体に参加できるというビジョンのひとつの懸け橋になればいいなと考えていました。実際に昨年行われた2017年度の中高生世代キャンプには青少年キャンプに参加した子が多く参加してくれました。キャンプ中にも青少年キャンプの話題が多く上がっていたため、今までの努力が実を結んで青少年キャンプがうまく懸け橋になっているのだと感じました。青少年キャンプの最終日にいつも中高生世代キャンプの宣伝をさせていただき、いつもありがとうございます。

しかし今年の青少年キャンプを通して、このキャンプはただの懸け橋や通過点ではなく、子どもたちは毎年このキャンプを本当に楽しみにしているのだなと感じました。清里という場所を存分に楽しむことができ、良い意味でとても自由なキャンプは意外と少なく、青少年キャンプは子どもたちにとってとてもワクワクするキャンプなのだと思います。リピーターの子が多いことがその証明になっていると思います。「そろそろプログラムを変えてほしい」という声を振り返りの時間にたくさん聞いたので、ぜひ来年は新しいものを何か取り入れて、初めて来た子だけでなくリピーターの子も全力で楽しめるようなキャンプになったらいいなと思いました。

私は、来年は就活などがあり、参加できるかどうかはまだ分かりませんが、もし参加できるようであればぜひ参加したいです。3日間ありがとうございました。

日本を愛したラッシュの姿を伝える『キープへの道』

公益財団法人キープ協会
ポール・ラッシュ記念館
副館長　秦　英水子

たとえ和訳が完成しても、実際に出版に漕ぎ着けるには版権のクリアなど、いくつもの高いハードルを越えねばならず、実に40年以上も翻訳が待たれていたのが本書『キープへの道』（立教大学出版会刊：松平信久氏・北條鎮雄氏訳）だ。

原作の“The Road to KEEP”は、「清里の父」と呼ばれるポール・ラッシュが思い描いていた多岐にわたる事業が軌道に乗った1960年代後半に、アメリカ人ジャーナリストのエリザベス・アン・ヘンフィルによって書かれたものだ。彼女はラッシュへの直接インタビューはもとより、周囲の人々へのヒアリング、地道な独自の調査を行い、一人のアメリカ人が昭和という激動の時代を極東の異国「日本・清里」で人生を賭けた姿を追って実録伝記としてまとめた。原作が書かれた当時、ヘンフィル女史は夫とたびたび清泉寮に長期滞在し、ラッシュと親交を深めていたことが当時の記録からもわかる。ラッシュ自身が伝記の原稿を確認し、本人の存命中に出版されたということも面白い点である。「この本を日本語にしたい！」という願いはキープ協会内でも強く持ち続けられていたが、なかなか進展せず、暗礁に乗り上げた頃に「松平先生にお願いをした」という知らせがあった。そしてそれから数年の時を経て、今ようやく手の中に形として現れたのが本書である。

生き生きと描かれる当時の様子は圧巻である。読者は、もとから日本語で書かれていたかのように、素晴らしく読みやすい訳文に驚かされるだろう。これは、聖公会の教育ミッションに長らく従事された訳者の先生方だからこそ表現できるものであり、またラッシュへの深い理解があり、なおかつ昭和という変化に富んだ時代をご存知であるからこそ描けるものである。副題の「昭和史を拓いたポール・ラッシュ」は、ラッシュにとって大変に嬉しい賛辞であろうと思う。ラッシュの功績には時代が後押ししていた部分もあったが、彼は俯瞰的にかつ多角的に物事を見て大きなヴィジョンを描けた人であり、ヴィジョンを現実のものにするだけの忍耐強さと強烈なエネルギーを持ち合わせていた類まれな傑物であった。ベストを尽くすことを信念とした人の、一流の生きかたをそこに見ることができる。

ポール・ラッシュに一度でいいから会ってみたかったと思っている世代の私にとって、表情豊かなラッシュに直に触れられたような気持になる本書に出会えたことはこの上ない幸せである。『キープへの道』は、清泉寮創設80周年・清里聖アンデレ教会奉献70周年の本年、世代を超えた多くの方々にラッシュの精神を伝える契機のひとつになるであろう。ラッシュについてより深く知ろうとするならば、本書は「必読書」であり、これ以上のものはないと断言できる。

『キープへの道』補遺

上にご紹介いただいた本書に関して、発刊後知ることができたいくつかの点について補足させていただきます。

（1）廣嶋都留（旧姓名取）さんの回想によれば、ヘンフィルさんはこの本の執筆にあたり、廣嶋さんと何度も相談し、その構成、内容などについて意見交換をされたとのことです。

（2）ヘンフィルさんの本書刊行（一九六九年）以降の消息について不明でしたが、秦さんの調査により、一九八五年八月五日に、ハワイで亡くなられたことが判明しました。死因は肺ガンであったことを、廣嶋さんから伺いました。

（3）BSA九〇年記念誌上の武藤六治主教の記事によれば、日本聖徒アンデレ同胞会は、戦時中に政府の圧力で「青年同胞会」に名称を変更したとのことです。私は、本書で、文献上それを確認できなかったと書きました。この点について、武藤主教に伺ったところ、「私も調べてみたが、文献には残っていない。しかし、以前、戦前からの会員であった金子忠雄さんなどからそう聞いた覚えがある」とのお答えでした。このことについて、何か情報をお持ちの方はどうぞお知らせ下さい。

（4）NHKを国営放送として訳したことにコメントをいただきました。NHKは、その前身が一九二四年に社団法人として発足しましたので、設立当時も国営ではありませんでした。

（5）「植松喜久江」さんを、「喜代枝」、「武藤満里子」さんを、「満理子」と誤記した部分があります。失礼をお詫びして訂正いたします。

『キープへの道』翻訳者
松平信久

清里高原だより 清泉寮ニュース

新・清泉寮ジャージーハット グランドオープンしました！

前号でもお伝えしましたが、清里高原の名物、清泉寮ソフトクリームやジャージー牛乳のお土産を販売している「清泉寮ジャージーハット」がいよいよ7月14日にグランドオープンを迎えました！

新店舗内に移転する清泉寮パン工房の天然酵母パンや、広くなった店内スペースでのお買い物、300㎡を超える大展望テラスからの絶景を楽しみにいらしてください。有機ジャージー牛乳を使用した軽食やスイーツを提供するミルクバーには新メニューも登場しました。

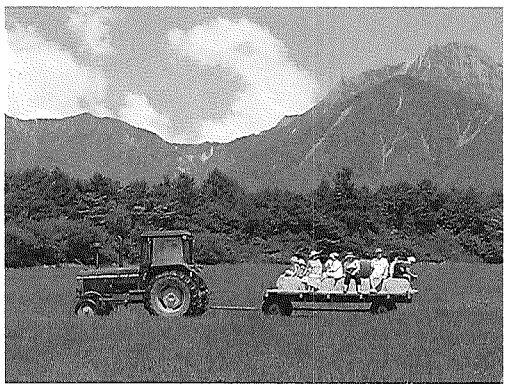
さらに、7月22日にはオープンを記念して、「北の杜吹奏楽団」のミニコンサートを開催。14時からテラスにて、観覧は無料です。

夏の清泉寮は爽やかな風が吹き、木陰に入ると非常に涼しいので森の散歩がおすすめです。この機会にぜひ清里高原へ足をお運びください。

夏休み　らくのう体験広場 開催のお知らせ

気軽に牧場気分が楽しめて大人気の「らくのう体験広場」夏休みも開催します！

牧草を積んだ荷台に乗り、トラクターに引かれて牧草地をのんびりとドライブする「ヘイライド」と、清泉寮の牧場で搾られたジャージー牛乳から手づくりする「バター作り」の2つが体験できます。



期間：7月28日（土）～9月2日（日）
時間：10時～15時（天候により中止の場合あり）
料金：どちらも1回500円
お問合せ：清泉寮ファームショップ055１－48－4888
※ご予約は不要です

アメリカ・ケンタッキー州よりベリア大学のインターン生が来ています！

国際交流事業の一環として、キープ協会では毎年アメリカ、フランス、フィリピンといった国々からのインターン生の受入を行っています。今回はアメリカ人インターン生のアナさん、レベッカさんの2名について、そしてキープの国際交流事業についてご紹介いたします。

アナさんはポールラッシュ記念館にて、文書の整理やケンタッキー州について紹介する特別展示を作成します。レベッカさんは国際交流事業を担当し、各種英会話プログラムの企画準備を行います。両名とも日本語や日本文化に対する興味関心が高く、また将来は英語教育に携わりたいという希望を持っており、2か月間の滞在を通じ日本語の習得や異文化で英語を教えるノウハウを学びます。7月21日までの滞在予定です。

グローバル化や英語教育へのニーズの高まりから、キープ協会では現在、様々な英会話プログラムを実施しています。特に小学生対象の「清里イングリッシュキャンプ」は、清里の豊かな自然環境の中で楽しみながら英語に触れる機会として、近年多くの参加者を集めています。そのほか、誰でも気軽に参加できる英会話レッスンを毎週北杜市内で開催しています。

また受託事業として、北杜市の中学生海外交流事業のコーディネート業務や、地域の学校へ招かれての異文化学習授業など、地域の国際交流推進に積極的に関わっています。

お問合せ：キープ協会企画部
0551－48－2688

BSA通信の発行

BSA通信を発行した。

BSAとはなにか、どんな活動をしているかということを各教区発行の時報、「管区事務所だより」などを通じて日本聖公会の聖職・信徒に広く知ってもらうことが目的である。「BSAは全国区だ」と言われる。しかし、よく見ると東京・横浜両教区と盛岡、福岡、そして散在する個人会員を除けば、ほとんど空白地帯である。

空白地帯は会員がいないから、情報も届かない。こうした状況をなんとか改善できないものか、と私は考えてきた。

「BSA通信」の発行によって、全国の聖職・信徒がBSAに関心を持ってくれるようになれば、幸いである。

「BSA通信」第一号は、足立新執行部の発足とBSA創立90周年記念誌『希望のBSAをめざして』の発行を中心とした内容で、3月末に発行、各教区の時報編集部に掲載を要請した。

また、各教区主教にも協力をお願いした。

早速『管区事務所だより』が第331号（3月25日発行）、東京教区時報「コミュニオン」（4月1日発行）、横浜教区報（5月号）、大阪教区報（4月号）、沖縄教区時報（4月号）でもそれぞれ掲載してくれた。

九州教区では福岡支部の秋山献之支部長が「BSA通信」を各教会に流してくれた。このようにスペース等の事情で時報に掲載出来ない場合は、代替方法を検討するなど、各教区とも好意的に対応してくれている。

BSAのことが教区時報等で紹介されるのは、初めてのことである。（理事　吉松英美）

お詫び訂正

本紙前号（162号）のVISION文芸欄中、松岡正治氏投稿の俳句に季語の誤植がありました。正しくは「爽やかや清泉寮のポール像」でした。

また、BSA90周年記念誌『希望のBSAをめざして』の18ページ、古本純一郎主教の「いつも喜んでいなさい」の下から9行目（テサロニケの信徒への手紙一15：16－18）とあるのは、正しくは（テサロニケの信徒への手紙一5：16－18）でした。

いずれもお詫びして訂正いたします。

訃報

セバスチャン　小林哲夫（87才）
横浜聖アンデレ教会
2月9日逝去

セシリア　三枝成子（85才）
三光教会
6月19日逝去

ヨハネ　根津吉夫（93才）
清里聖アンデレ教会
7月1日逝去

会費納入のお願い

本会の運営は皆さまの会費、賛助会費を財源として実施されております。今回、今年度の会費等納入のための振込用紙を同封させていただきました。ご協力のほどよろしくお願い申し上げます（過年度未納分も併せて受付けております）。

編集後記

・早い梅雨明けとその後の豪雨禍、被災された方々に編集室よりお見舞い申し上げます。
・今号は記事満載となり、好評連載中の「VISION文芸」は休ませていただきました。ご了承ください。（N・H）

★一般ご家庭の引越
★オフィスの引越
★フロアーの移動
★各種展示会セッティング etc…
事務所引越のエキスパート!!
株式会社ギンテック
港区港南3-4-12
フリーダイヤル 0120-223-008
TEL・3471-5313

ホームメイド・チーズケーキの店
CHEESE CAKE JOHANN HOME ヨハン MADE
和田博子
目黒区上目黒1－18－1
TEL 3793－3503

立教企画グループ
学校業務受託、人材派遣等承ります。
株式会社 立教企画
株式会社 立教オフィスマネジメント
株式会社 立教ファシリティマネジメント
株式会社 立教ライブラリーマネジメント
http://www.rikkyo-planning.co.jp